

[テーマ企画：特集 (連用修飾的) 複文] まえがき

風間 伸次郎

1. 企画に至った経緯

『語学研究所論集』では、これまでの「受動表現」「アスペクト」「モダリティ」「ヴォイス」「所有・存在表現」「他動性」に続き、今回は「(連用修飾的) 複文」という統一テーマを組んで、各言語における状況を報告していただくということになった。

まず、日本語による32の例文からなるアンケートを作成し、これに答えていただくことによって、各言語のデータを収集することにした。アンケートの構成や意図については、本稿稿末のアンケート本体も参照されたい。

こうして25の言語に関するデータが集まった。これは東京外国語大学にある27専攻語のうちの14言語にマダガスカル語、フィンランド語、ハンガリー語、ダグール語、ナーナイ語、ソロン語、ニブフ語、カム・チベット語、ラワン語、タミル語、トルクメン語を加えたものとなっている。

これらの言語を語族別に見ると、まずドイツ語、イタリア語、フランス語、スペイン語、ロシア語、ペルシア語、ウルドゥー語（ヒンディー語もウルドゥー語で代表する、以下も）は印欧語族の言語である。ソロン語、ナーナイ語はツングース諸語、ダグール語、モンゴル語はモンゴル諸語、トルコ語、トルクメン語はチュルク諸語に属するが、これらは（系統ではなく）構造的な類似などの点からアルタイ諸言語としてまとめられることのある言語群である。フィンランド語、ハンガリー語はウラル語族、アラビア語はアフロ・アジア語族の言語である。タミル語はドラヴィダ語族、マレーシア語、マダガスカル語はオーストロネシア語族、ラワン語、カム・チベット語とともに、中国語は（異論もあるが）シナ・チベット語族、とされている。ニブフ語、朝鮮語、日本語は系統的に孤立した言語とされている。ただ、複数の語族のデータからなるものの、アフリカやオーストラリア、ニューギニア、カフカース、新大陸の諸言語のデータを欠いているため、本稿での以下に展開される類型論的考察はきわめて不十分なのであることは否めない。

2. 先行研究

ここでは節のつながりに関する類型論である亀井・河野・千野（編）（1996: 1105-1107）をとりあげ、若干の考察を加え、しかるのちに本特集のデータについての分析を行う。

動詞あるいは節（すなわち、動詞と名詞句、副詞句などの結びつき）のつなげ方にはいくつかの型がある。その代表的なものに、次の3つがある。一つは、verb serialization (Noonan, 1985: 55)、あるいは、serial verb construction (Schachter,

1974: 254; Li & Thompson, 1981: 594)とよばれるものである。仮に、ビー玉型動詞連続とよぶ。次は、verb chains, verb chaining, clause chaining, あるいは chaining structure (Bickerton, 訳書 1985: 123; Longacre, 1985: 238) とよばれるものである。仮に、鎖型動詞連続とよぶ。最後は、co-ranking structure (Longacre, 1985: 238)とよばれるものである。仮に団子型動詞連続と名づける。3つ型の例をあげる。例文1と2は日本語、3と4は英語、5はガーナの言語で、コンゴ・コルドファン語族に属するアカン、6は北京の中国語である。

《鎖型動詞連続》

- 1) 太郎は学校へ行って、本を読んだ。
- 2) 花子ではでかみかけられないので、不満に思っている。

《団子型動詞連続》

- 3) John went to school and (he) read a book.
- 4) Mary is unhappy as she cannot go out.

《ビー玉型動詞連続》

- 5) Kofi kɔɔe baɛ.

コフィ 行った 来た

「コフィが行って、帰って来た」(Schachter, 1974: 254)

- 6) tā tiān-tiān chàng gē xiě xìn

彼 / 彼女 日 日 歌う 歌 書く 手紙

「毎日、彼 / 彼女は歌を歌い、手紙を書く」(Li & Thompson, 1981: 595)

鎖型は日本語のほかにも、ニューギニア、エチオピア、北米、南米などの言語に、団子型は英語など西洋の言語に、ビー玉型はガーナ、ナイジェリアなど西アフリカの言語、中国語、ヴェトナム語などの東南アジアの言語や、世界各地のクリオールなどにみられる (Bickerton, 訳書 1985: 122-125 と、次の段落に引用してある文献を参照)。

これらの3つの型はすべて、動詞あるいは節をつなげる方法である。共通する点と異なる点は以下のとおりである (Li & Thompson, 1981: 594; Longacre, 1985; Noonan, 1985: 55, 77; Schachter, 1974: 254; Thompson & Longacre, 1985: 175-176)。

A) 動詞の形について 団子型とビー玉型では、動詞はすべて言い切り形を用いる。すなわち、個々の動詞が独立の文の述語として使える。ただし、ビー玉型をもつ言語のうち、中国語、ヴェトナム語などの東南アジアの言語は動詞の活用がなく、動詞の形は1つで、言い切り形と非言い切り形の区別はない。その場合、その唯一の形を使う。例は6。例文5では、個々の動詞が言い切り形をとっている。団子型の例文3と4の動詞も同様である。鎖型では文末の動詞だけが言い切り形をとり、その他の動詞(すなわち、文末動詞に先行する動詞(はすべて非言い切り形を用いる。すなわち、文末の動詞以外は、独立の文の述語にはなれない。たとえば、1の「行って」と2の「出かかけられないので」は独立の文の述語にはなれない)。

B) 主語について ビー玉型では、文頭の動詞に主語があるだけで、他の動詞には主語がない。例文5の Kofi と6の tā がその主語である。鎖型でも普通、主語が1つしか出ない。例は1の「太郎」と2の「花子」である。団子型では、個々の動詞がそれぞれ主語をとることができる。しかも、個々の動詞がそれぞれに主語をとることは珍しくない。例は、3の John と he、4の Mary と she である。

C) つなげる要素 団子型では接続詞を用いる(接続詞を串に見立てて、この型を団子型とよぶことにしたのである)。鎖型では動詞の活用接辞が節のつながりを示す。ビー玉型は接続詞を用いない。また、動詞にはつながりを示す接辞もない(つながりを示す要素がないので、団子と対比して、ビー玉とよぶことにしたのである)。

(中略)

語順の面では、鎖型はSOVの型の言語によくみられる。例は日本語である。ビー玉型はSVOの型の言語によくみられる。例文6, 7, 8はすべて、SVOの語順を示している。(中略)

動詞の間のさまざまな意味の関係は、鎖型では、非言い切り動詞の接辞で表わす。たとえば、日本語では、「～て、～ので、～ながら、～なのに、～から、～ために」などである。団子型では接続詞を用いる。英語では and, but, for, because, while, although, since, so that などである。ビー玉型には接続詞がないので、同じ文が文脈などによってさまざまな意味を表わせる。(中略)

[参考文献]

Bickerton, D. (1981), *Roots of language* (Karoma, Ann Arbor; 筧寿雄(まか)訳『言語のルーツ』大修館書店, 東京, 1985)

Li, Charles N. & Sandra A. Thompson (1981), *Mandarin Chinese* (University of California Press, Berkeley)

Longacre, Robert E. (1985), "Sentences as combining of clauses", in Shopen (ed.) (1985), Vol. 2

Noonan, Michael (1985), "Complementation", in Shopen (ed.) (1985), Vol. 2

Schachter, Paul (1974), "A non-transformational account of serial verbs", *Studies in African Linguistics, Supplement 5*

Shopen, Timothy (ed.) (1985), *Language typology and syntactic description*, 3 vols. (Cambridge University Press, Cambridge)

Thompson, Sandra A. & Robert E. Longacre (1985), "Adverbial clauses", in Shopen (ed.) (1985), Vol. 2

(亀井・河野・千野編 1996: 1105-1107)

まずここには明記されていないが(原典のどこかには言及があるかもしれないが)、上記の3つの動詞連続のタイプは、語の形態論的構成を出発点とするいわゆる古典的類型論の分類と密接な関係があるものと思われる。

類型	動詞連続	言語
孤立型	ビー玉型	中国語, 東南アジア大陸部, 西アフリカの言語など
膠着型 (アルタイ型)	鎖型	日本語, 朝鮮語, アルタイ諸言語など
屈折型	団子型	印欧語族の多くの言語など

この記述では、ビー玉型とSVO言語の関連が指摘されているが、孤立型の言語がSVO語順をとりやすいことは知られている(形態的表示がないため、動詞の前後という語順の力に頼らざるを得ないという理由がある)。したがってこの関連も孤立型の言語であることに起因するものと考えたい。

次に、名称について検討する。「ビー玉型」の喩えと名称はよいと思う。鎖型はさておき、団

子型の喩えと名称はそぐわない気がする。接続詞はその前後の2者をつなぐのみで、文全体に対し「串」のような力を発揮しないからである。

動詞の形についての上記の記述は的確であるが、団子型の言語の動詞のつながりには、さらに分詞や不定詞など準動詞（非定形動詞）によるものがある。他方、ビー玉型や鎖型にもある程度は接続詞によるつながりがある。したがって、この類型は、それぞれのタイプの言語でもっとも頻度が高いやり方であり、しかも特に等位的なつながりに関するものであると限定したほうがよいように思う。

3. 総論

以下の本論では、「3. 総論」と「4. 各論」に分けて分析結果を提示することにする。

3.1. 定動詞 vs. 準動詞

上記の2. 先行研究でみたように、動詞のつなげ方には大きく分けて、①（屈折した定動詞を接続詞によってつなぐ）団子型動詞連続（co-ranking structure）と、②（副動詞などをはじめとする準動詞によって動詞をつなぎ、定動詞はもっぱら文末にのみ用いる）鎖型動詞連続（chaining structure）、③（孤立型で変化の無い動詞をそのまま並べる）ビー玉型動詞連続がある、とされている。

今回の調査の主たる目的は次の2つである。まず1つは、具体的にどのような言語がどの類型に属すのか、ということである（3.1.1. 言語別の結果）。2つ目は、どのような意味関係の動詞のつながりがどのような動詞連続によって示されやすいのか、ということである（3.1.2. 表現別の結果）。

以下に先ずその点について今回のデータを整理した結果を表に示す。表中で、F は定動詞形（finite form）によるものを示し、N は各種の準動詞形（non-finite, 副動詞のみならず分詞や不定詞、名詞化+格、などを広く含む）である（なお表には、表現ごと、および言語ごとにNの合計の数値を付した）。斜字体はその使用があまり一般的でないことを示す。他に、A は接辞（affix）、S は単文（simple sentence）、I は言いさし（insubordination）である。モンゴル語は2方言を扱っているため、方言差がある場合には // で示した。さらに説明が必要であると考えたものについては、* を付した。これについては各論に説明を記した。なお「確生」など、表中の省略表現については、3.1.2. を参照されたい。

表1：つなぎ方の整理（その1:(1)-(8)）

	同時	継起	理由	異主語	付帯	並列	理由カ	理由デ
ドイツ	F/N	F/N	F/N	F	F/N	F	F	F
フランス	N	F/N	F/N	F	F	F	F	F/N?
イタリア	F/N	F/N	F/N	F	F/N	F/N	F	F/N
スペイン	F/N	F	F/N	F	F	F/N	F	F
フィンランド	N	F	N	F	F	F	F	F
ハンガリー	N	F	F	F	N	N	F	F
ロシア	F/N	F/N	F/N	F	F	F	F	F
中国	F	F	F	F	F	F	F	F
朝鮮	N	N	N	N	N	N	N	N
日本	N	N	N	N	N	N	F	F
モンゴル	N	N	N	N	F/N	N	F/N	F/N
ダゲール	F	N	F	F	N	F	F	F
ナナイ	N	N	F	F	N	F	F	F
ソロン	N	N	N	F	N	F	F	F
ニウフ	N	N	N	N*	N	N	N	N
カム・チベット	F	F	F	F	F	F	F	F
ラワン	F	N	N	F	N	F**	F	—
マレーシア	F	F	F	F	F	F	F	F
マラガシ	F/N	F	F	F	F	F	F	F
ウルトケー	N	F/N	N	F	N	F	F	F
タミル	N	N	N	F	N	N	F	N
アラビア	F	F	F	F	F/N	F	F	F
ペルシア	F	F	F	F	F/N	F	F	F
トルコ	F/N	N	N	F	F/N	F	F	F/N
トルクメン	F/N	N	N	F	F/N	F/N	F	F
Nの合計	14.5	13.5	13.5	4	13.5	7.5	2.5	5

表2：つなぎ方の整理（その2：(9)-(17)）

	趨向	目的	恒条	確生	確発	仮条	反実1	反実2	真理
ドイツ	N	F/N	F	F	F	F	F	F	F/S
フランス	N	N	F	F	F	F	S	S	S/F
イタリア	N	N	F/S	F/N	F/N	F	F/S	F	S/N/F
スペイン	N	F/N	F/S	F	F	F	S	S	S/F
フィン	N	F	F	F	F	F	S	N	S/F
ハンガリー	N	F	S	F	F	F	F	F	S
ロシア	N/F	F	F/S	F	F	F	F/N	F/N	S/F
中国	F	F	F	F	F	F	F	F	S/F
朝鮮	N	N	N	N	N	N	N	N	N
日本	N	N*	N	N	N	N	N	N	N
モンゴル	N	N	N	N/F*	N/F*	N	I/F	I/F	N
ダグール	N*	F	F	F*	N	N	F	F	N
ナナイ	N/A	N	N	N	F	F	F	F	F
ソロン	A	F	N	N	N	N	F	F	N
ユグフ	N	N	N	N	N	N	F*	F*	S
カムチベット	N*	F	F	F	F	F	S	S	F
ラワン	N	N	S	F	F	N	N	N	N
マレーシア	F/N?	F	F	F	F	F	F	I	F
マラカシ	F	F	S	F	F	F	F	F	F
ウルトゥー	N	F	F	F	F	F	S	S	N
タミル	N	N	N	N	N	F	N	N	N
アラビア	F	F	F	F	F	F	F	S	S
ペルシア	F	F	F	F	F	F	F/S	F/N	F
トルコ	N	F	N/S	N	N	F	I	I	S/F
トルクメン	N	F	N/S	N	N	N	N	N	N
Nの合計	18.5	10	8	9	9	8	5.5	7	9.5

表3：つなぎ方の整理（その3:(18)-(24)

	仮働	仮願	仮心	ナラ	予想	予無	相関
ドイツ	F	S	F	F	F	F	F
フランス	F	S	F	F	F	F	F
イタリア	N/F	S	F	F	F	F	F
スペイン	F	S	S	F	F	F	F
フィン	F/N	S	F	N/F	F	F	F
ハンガリー	F	S	N	N	F	F	F
ロシア	F	S/F	F	F	F	F	F
中国	F	F	F	F	F	F	S
朝鮮	N	S	N	N	N	N	S
日本	N	N	N	F	N	N	S
モンゴル	N	N/S	N	N	N	N	F
ダグール	N	N	N	N	N	N	N
ナナイ	N	N	F	F	N	F	F
ソロン	N	N	N	N	N	N	F
ニガフ	N	S	N	N	N	N	S
カムチベット	F	S	—	F	F	F	F
ラワン	N	S	N	N	N	N	—
マレーシア	F	F	F	F	F	F	F
マラカシ	F	F	F	F	F	F	S
ウルドゥー	F	S	F	F	F	F	F
タミル	N	F	N/F	F	N	N	S
アラビア	F	F	F	F	F	F	F
ペルシア	F	F	F	F	F	F	F
トルコ	N	N/S	F	F	N	F	S
トルクメン	N	S	N	F	N	N	S
Nの合計	12	5	9.5	7.5	11	9	1

表4：つなぎ方の整理（その4:(25)-(32)）

	言願	言提	言放	仮逆	実逆	逆接3	マデ	マデニ	Nの計
ドイツ	I	I/S	F	F	F	F	—	—	3.5
フランス	I	I	F	F	F	F	F	F	4.5
イタリア	I	S	F/N/I	F	F/N	F	F	F	8
スペイン	I/S	F/S	F	F	F	F	—	—	2
フィン	F	S	F	F	F/N	F	F	F	5.5
ハンガリー	I	I	N	F	F	F	F	F	7
ロシア	I/F	S	F	F	F	F	F	F	3
中国	F	S	F	F	F	F	F	F	0
朝鮮	N	S	N	N	N	N	N	N	29
日本	I	I	I	N	F	F	N	N	23
モンゴル	I	S	F	F	F	F	N	N	20
ダグール	N	S	F	N	F	F	N	N	17
ナナイ	I	S	F	F	F	F	N	F	10.5
ソロン	F	S	F	F	F	F	N	N	17
ユグフ	I	S	N	N	N	N	N	N	25
カムチベット	I	S	F	F	F	F	F	F	1
ラワン	—	—	—	—	N	N	F	F	16
マレーシア	I	S	F	F	F	F	F	F	0.5
マラカシ	I	F	F	F	F	F	N	N	2.5
ウルドゥー	I	S	F	N	F	F	F	N	7.5
タミル	N	S	F	N	N	N	N	N	23.5
アラビア	I	S	F	F	F	F	F	F	0.5
ペルシア	I	S	F	F	F	F	-	-	1
トルコ	I	I*/S	F	N	N	F	N	N	13.5
トルクメン	I	N	F	N	N	N	N	N	21
Nの合計	3	1	3.5	8	7	5	11	11	

次にこの集計結果のうち、言語別の結果と表現別の結果について検討を加えることにする。

3.1.1. 言語別の結果

N, すなわち準動詞形を1点 (/、// の前後のものは0.5点)として集計した結果、諸言語の準動詞への依存度は次のような順序であることが分かった。

朝鮮語(29) > ニブフ語(25) > タミル語(23.5) > 日本語(23) > トルクメン語(21) > モンゴル語(20) > ダグール語(17) = ソロン語(17) > ラワン語(16) > トルコ語(13.5) > ナーナイ語(10.5) >
イタリア語(8) > ウルドゥー語(7.5) > ハンガリー語(7) > フィンランド語(5.5) > フランス語(4.5) > ドイツ語(3.5) > ロシア語(3) > マラガシ語(2.5) > スペイン語(2) > カム・チベット語(1) = ペルシア語(1) >
アラビア語(0.5) > マレーシア語(0.5) > 中国語(0)

上記の順位は、おおよそ動詞のつなぎ方における3つの類型を反映しているものと思われる。

すなわち、1位の朝鮮語からナーナイ語までは、SOVをはじめとするHead-finalな語順を持ち、格の数も多いdependent-markingな言語である。これは程度の差はあれ、鎖型動詞連続の言語の性格を示しているとみてよいだろう(鎖型動詞連続とSOV語順に相関関係のあることは知られている)。これらは準動詞優位の言語である。

次にイタリア語からペルシア語までは、主に団子型動詞連続の言語が占めている。ハンガリー語とフィンランド語(ともにウラル語族)、マラガシ語(オーストロネシア語族)、カム・チベット語(シナ・チベット語族)を除いて、皆印欧語族の言語であり、時制や法で屈折する定動詞を多く使用する、定動詞優位の言語である。しかし、定動詞優位ではあるものの、分詞や不定詞など若干の準動詞を備えている。ただその準動詞が使用できる範囲は、(特に鎖型動詞連続の言語に比べ)きわめて限られている。この点はアラビア語も同様である。ハンガリー語とフィンランド語はウラル語族の言語ではあるものの、ともにヨーロッパに位置し、周囲を印欧語族の言語に囲まれ、語順等をはじめ、これまで多大な影響を受けて来たことが指摘されている。他方、マラガシ語とカム・チベット語は孤立語的な性格を持っているので、次のグループに属するとみるべきかもしれない。

マレーシア語と中国語は、語形変化の少ない孤立型のタイプの言語である。マレーシア語はヴォイスなどに関する接頭辞や接尾辞を有し、動詞の語形変化を持つものの、ほとんど準動詞形を持たない。これらは典型的なビー玉型動詞連続の言語とみてよいだろう。アラビア語は、3子音を語彙的な意味を示す語根とし、内的屈折によって、ヴォイス、アスペクト、法、性、数、人称、などさまざまな文法カテゴリーを動詞に標示する言語であるが、不定詞以外、準動詞的な形式を用いないようである。ペルシア語と共に準動詞への依存度が低いことは、西アジアの地域的特徴であるのかもしれない。

筆者はしかし、3つに分かれるとみるより、まず大きく2つに分かれるものと考えたい。すなわち、鎖型と、団子型・ビー玉型の2つである。団子型・ビー玉型はともに接続詞によって節連結を行うが、and や or にあたるような接続詞は、一般に句や節をつなぐばかりではなく、語の接続にも用いられる。というより、語の接続形式が広く句や節の接続にも用いられる、と言った方が正確だろう。他方、鎖型はこうした接続のための形式を持たないことが多く、語の接続形式と、句や文の接続形式は異なっているのが一般的である。朝鮮語などでは、and にあたる形式に ha-go という形式があるが、これは「する」の意の動詞の副動詞形であり、むしろ動詞の副動詞形によって、名詞の並列も表わしている。つまり上記の言語とは逆の方向である。

上位の言語から、さらに検討を加える。朝鮮語とニブフ語はアルタイ諸言語とともに、いわば「アルタイ型」の類型を示す言語である。しかしこの2言語は、形容詞が動詞的な変化を示す点で、形容詞が名詞的な性格を示すアルタイ諸言語とは異なっている。形容詞が動詞的である分、動詞的なつながりの機能負担は大きくなることが予想できる。両言語は実に多様で豊富な副動詞の諸形式を有しており、1位2位を占めているのも納得がいく。

タミル語を含むインド言語領域の言語が、conjunctive participle というものを持ち、その他の点を含め、アルタイ諸言語と類似する(地理的にも連続する)面を示すことは、Masica (1976) 以来指摘されてきたことである。ドラヴィダ語族の言語の中でも、特に印欧語の影響の小さいとされているタミル語が今回の調査の準動詞依存に関して高い数値を示していることは注目に値する。

トルクメン語とトルコ語は共にチュルク諸語のオグズ語群に属するが、その数値はだいぶ異なっている。共に歴史的にペルシア語やアラビア語から大きな影響を受けて来たものと思われるが、トルコ語は特に近年ヨーロッパの印欧語から大きな影響を受けつつある。両者の数値の違いの原因はこうした印欧語からの影響に起因することが考えられるが、精査を必要とする。

同じように、同じウラル語族でもハンガリー語よりフィンランド語のほうが数値が低くなっているのは、フィンランド語における印欧語の影響がより大きかったことを反映しているものと考えたい。同じツングース諸語に属するソロン語とナーナイ語の数値の違いは、媒介言語(それぞれ、中国語とロシア語)の違いも関係していると思われるが、やはりナーナイ語におけるロシア語の影響の大きさと、ソロン語におけるモンゴル語の影響(副動詞を多用する、ロシア語とは逆方向への影響)を反映しているものと考えたい。

印欧語族イタリアック語派の中でも、イタリア語とフランス語とスペイン語の間に比較的大きな数値の開きがあることも興味深い。アンケート結果の説明を読んでみても、イタリア語はあきらかに分詞類の使用範囲が広い。亀井・河野・千野(編)(1996: 502-503)によれば、フランス語や英語を中心として孤立型・分析的な言語が分布することが指摘されている(西ヨーロッパ言語連合)。ただ、スペイン語のアンケート結果においてはもっぱら1つの表現のみがあがっているのに対し、イタリア語とフランス語のアンケート結果の方では複数の表現の可能性が精

査されている。結果として、/ の前後に準動詞形も記載され、これが 0.5 点となるためにスペイン語に比べイタリア語とフランス語の点数が高くなったという面もあると考えられる。

ラワン語とカム・チベット語はともにチベット・ビルマ語族の言語である。この語族の膠着語的な面と孤立語的な面をそれぞれ反映していると考えられる。ただ、特にカム・チベット語の諸形式をどう判断するかについて、筆者には十分な自信が無い。これらの言語の専門家の御意見や再検討を望む。

3.1.2. 表現別

以下が表現別の点数およびその順位である。

[9]趨向(18.5)>[1]同時(14.5)>[2]継起(13.5)=[3]理由(13.5)=[5]付帯(状況)(13.5)>[18]仮(定条件+)働(きかけ)(12)>[22]予(想を伴った条件)(11)=[31](時間的期限1)マテ(11)=[32](時間的期限2)マテニ(11)>[10]目的(10)>[17](一般的)真理(9.5)=[20]仮(定条件+)心(配)(9.5)>[12]確(定条件+)生(起)(9)=[13]確(定条件+)発(生)(9)=[23]予(想を伴わない条件)(9)>[11]恒常(的条件)(8)=[14]仮(定)条(件)(8)=[28]仮(定的な)逆(接)(8)>[6]並列(7.5)=[21]ナラ(7.5)>[16]反実(仮想)2(7)=[29]アクチュアルな逆接[実逆](7)>[15]反実(仮想)1(5.5)>[8]理由・テ(5)=[30]逆接3(5)=[19]仮(定条件+)願(望)(5)>[4]異主語(4)>[27]言(いさし・つき)放(し)(3.5)>[25]言(いさし・)願(望)(3)>[7]理由・テ(2.5)>[26]言(いさし・)提(案)(1)=[24]相関(構文)(1)

3.1.2.1. 趨向(移動の目的)の特異性

まず趨向(移動の目的)の特異性が明らかになった。「見に行く」とは「見るために行く」に近い意味を実現するので、「移動の目的」などと呼ばれるが、「～するために～する」という他の動詞一般における目的表現とは大きく異なり、形式も全く異なるものが用いられる(特に不定詞など)。つまりこれは目的の動作動詞と移動の動詞の一体性がきわめて強いことを示している。したがって定動詞の現れる比率が最も低くなっているのである。

3.1.2.2. 時系列に沿って行われる動作

この趨向を除くと、上位に並ぶのはもっぱら同時もしくは時系列に沿って行われる動作である。これらの表現でも、2つの動作の結びつきは比較的強く、表現自体の生起頻度も高いものと思われる。そのため、団子型動詞連続の言語でも、分詞構文をはじめとする準動詞が出現するものと考えられる。ビー玉型動詞連続の言語では、何の接続形式も必要としない、いわゆる並置(parataxis)が起り得る。[3]理由なども、経験知から前件が後件の理由になることは予想できる場合が多いだろう。実際に使用した例文は「(私は)昨日階段で転んで、ケガをしてしま

った。」であるが、「(私は) 昨日階段で転んだ, ケガをしてしまった。」のように接続形式が無くとも前件と後件の関係は予測可能であると考ええる。

3.1.2.3. 主語の異同

上記の考えに対しては, [8]理由・デ^o や [7]理由・カ^o の順位が低いことをどう説明するのか, という異論が考えられよう。[7], [8] はともに前件と後件で主語が異なっている。印欧語の分詞構文などは, 異主語となるととたんに使えなくなる。条件の例文の多くや, [4]異主語, [24]相關構文などの順位が低いのは, 何よりこの異主語という理由によるものと考えられる。

3.2. 接続法

印欧語族の諸言語をはじめとして, 広く *irrealis* の事象, より詳しくは非事実, 話者が事実性は低いと考えている事象, 未来の出来事, 目的, などに「接続法」が用いられることはよく知られている。今回の調査でも接続法を用いる言語が 10 言語あり, これは印欧語族の言語とウラル語族の言語にアラビア語が加わったものであった。

しかし, 諸言語における「接続法」は等価なものだろうか? おそらく言語によってその接続法のカバーする範囲は異なっているに違いない。

そこで今回のデータにおける接続法の使用を整理してみたのが以下の表である。ここでは従属節と主節に分けて整理し, 表現は使用の多い順に上から並べ, 言語も使用の多い順に左から並べてみた。なおフィンランド語では接続法ではなく, 条件法と呼ばれているものを対象にしている。

表 5: 従属節における接続法の使用

	ヘルニア	ウリア	ハンガリ	スペイン	アラビア	ロシア	ドイツ	ウラルドゥ	フランス	フィン	計
25)言願従		☑	☑	☑		☑	II			☑	6
10)目的従	☑			/☑	☑	☑				☑	5
15)反実1従			☑	☑		☑	II			☑	5
26)言提従	☑	/☑	☑				/II	☑			5
16)反実2従		/☑	☑			☑	II				4
20)仮+心従	☑		☑	☑	☑						4
27)言放従	☑	☑	☑					☑			4
9)趨向従	☑				☑	/☑					3
21)ナラ従		/☑	☑					☑			3
32)マデニ従		/☑			☑				☑		3

18)仮+働従				☑				☑				2
22)予条従	☑			☑								2
23)予無条従		☑					/II					2
31)ア ^レ 従					☑				☑			2
11)恒常従	☑											1
14)仮条従	☑											1
24)相関従	☑											1
28)仮定逆従	☑											1
29)実逆従									☑			1
	10	7	7	6	5	5	5	4	3	3		

表 6: 主節における接続法の使用

	ド イツ	イタリ ア	ロシ ア	ハン ガリ	アラ ビア	フィン	ペル シア	ウル ドゥ	フラン ス	スヘ ン	計
19)仮+願主		/☑	☑	☑	☑	☑	☑				6
16)反実2主	II		☑	☑		☑					4
15)反実1主	II		☑	☑							3
21)ナラ主	I	☑			☑						3
7)理由ヲ主	I						☑				2
18)仮+働主	I	☑									2
20)仮+心主	II			☑							2
22)予条主	I	/☑									2
23)予無条主	I	☑									2
24)相関主					☑		☑				2
25)言願主			☑			☑					2
27)言放主								☑			1
14)仮条主					☑						1
計	8	5	4	4	4	3	3	1	0	0	

まず言語別にみる。

ペルシア語では、特に従属節における使用が際立っており、事実/非事実に関わりなく、広く従属節に接続法を用いることが分かる。イタリア語とドイツ語は、印欧語族の言語の中ではよく接続法を保っている(ラテン語など古典語のデータがあれば、対照により確実に論証できるのだが)。中でもドイツ語はI式による主節における接続法の使用が顕著である。同じウラル

語族でもハンガリー語のほうが接続法の使用が多いのは、あるいはドイツ語やロシア語からの影響であろうか。フランス語とスペイン語では接続法が衰退していることもわかる。特に主節では全く使用しない。ウルドゥー語とアラビア語は地域的に（アラビア語は系統的にも）、他の言語群よりやや離れているが、その接続法の使用も他の言語とはやや違った傾向を示している。次に表現別にみる。

言いさし、反実仮想、目的、が上位を占めており、これが接続法の使用における中核であることが分かる。目的はやや性格が異なるが、言いさしや反実仮想は非事実やモダリティと強い関わりを持っている点で共通している。趨向の数値が高いのも、移動の目的と捉えれば納得できる。

3.3. 文末のムード(法)／モダリティ

以下の 3.3.-3.5. は十分な分析ができなかった点であるが、重要な点であるので、記して今後の課題としたい。

なお以下では、ムード(法)／モダリティについて、より広い意味で用いられている「モダリティ」という用語を用いることにする。

印欧語では特に文末のモダリティによって接続の形式が制限される。[7]理由カラ（文末は働きかけのモダリティ）「時間がないから、急いで行こう」の例文がもっとも典型的で、例えばフランス語において、分詞類による構文が使えない。その理由は次のように説明できるだろう。分詞類などは、テンスやモダリティを表示できないので、主節の述語のモダリティは文全体に及んでしまう。したがって従属節が異主語であったり、異なるモダリティを持ったりすることができなくなると考えられる。このような[7]での制限は、ラワン語、トルコ語でも指摘されている。

日本語については、理由・逆接・条件の複文において、モダリティとつなぎの形式を検討した先行研究に角田(2004)があり、そこでは5つのモダリティのレベル(I「現象描写」、II「判断」、III「働きかけ」、IV「判断の根拠」、V「発話行為の前提」)を設定している。さらにこの5つのレベルに基づき、26の言語における複文でのつなぎの論考を集成した類型論的研究として、Tsunoda(ed.) (2013a, 2013b)がある。したがって、この問題の詳細についてはこれらの文献をまず参照されたい。

3.4. 聞き手の既知／未知・情報構造

理由説の内容に対する、聞き手の既知／未知が形式に影響すると考えられることがある（フランス語の[8]理由ノデ）。中国語では、[9]の趨向／移動の目的において、文中のどの部分が焦点になっているかによって、語順の違いが出るのが記述されている。

3.5. 孤立型言語における問題点

孤立型の言語では、(接続詞などの) 接続形式が必要か否か (つまり並置 (parataxis) が可能か否か)、節の順序の入れ替えは可能か、主要部標示か従属部標示か、といった点が問題になる。マレーシア語と中国語のデータでは、それらの可能性についても十分検討されているので、これらの点について対象を行うのも興味深い。今回それを行うだけの時間的余裕が得られなかった。今後の課題としたい。他にオーストロアジア語族のクメール語もしくはベトナム語、タイ・カダイ語族のラオ語もしくはタイ語のデータがあれば、孤立型言語における連用修飾的複文の共通性と違いを明確にすることができるかもしれない (さらに西アフリカにおける孤立型の言語のデータがあればなおよい)。したがってこれらの言語のデータが得られていないことは非常に残念である。

4. 各論

各論には気づいたことを記したが、ややメモのような浅い考察になってしまったことをお詫びしたい。

4.1. 同時動作

ソロン語において、同時副動詞にコピュラ動詞を連続させ、その後に継起副動詞を用いて同時動作を示すやり方は、モンゴル語からの影響によるものかもしれない。

4.2. 継起的動作

いわゆる物語的連鎖といわれるものだが、「～して～して～する」のように2つの副動詞が用いられる表現である。この場合に、2つの副動詞に同じものを使う言語と別のものを使う言語が観察された。これを整理しておく。

同じ：ロシア語、日本語、モンゴル語、ダグール語、トルクメン語

別：朝鮮語、ニブフ語、トルコ語

ただし、この違いは媒介言語の影響などによって生じた可能性もあることに注意しておく必要がある。

欧米の印欧語およびペルシア語、ウルドゥー語ではふつう1つしか副動詞を用いることができないようだが、ロシア語では2つの副動詞が用いられている。

4.3. 理由

ダグール語において、やりもらいの補助動詞が用いられている点が興味深い。従属節の主語(「私」と主節の主語(「骨」)が入れ替わるために、一種の指示転換の機能を果たす形式として用いられているものだろうか。

4.4. 同主語／異主語

ニブフ語の副動詞は、ここでは両方の節に現れ、研究者によってはこれを等位-従属節 (cosubordinate) を形成するものとみている。

異主語となると、印欧語やウラル諸語、チュルク諸語、ツングース諸語、ラワン語などで準動詞は使えなくなるため、準動詞を用いる言語は格段に減る。準動詞を用いることができるのはわずかに日本語、朝鮮語、モンゴル語、さらに分析によるがニブフ語のみである。これらの言語は、どの言語も SOV 語順でなおかつ動詞に人称変化がないという点で共通している。

[10] 目的に関しては、フランス語やイタリア語で、同主語では不定詞を用いなければならぬ、という制限が見られる。他方、ドイツ語やスペイン語では従属節も可能である。

4.5. 付帯状況

これはアンケート例文作成に関する反省であるが、イタリア語の項にあるように、文脈が無いとわかりづらい文をアンケート例文に用いてしまった。

付帯状況は、ヨーロッパおよびその周辺の言語では、複文によらず、前置詞によって表現する言語が多くあることがわかった (前置詞による言語: ドイツ語, フランス語, イタリア語, スペイン語, フィンランド語, ロシア語, トルク語・トルクメン語 (形容詞的派生 (propriative))).

すなわち、これは完全な単文となるので、準動詞を用いる場合よりさらに独立性の低い事象 (もしくは一体化している事象) とみなすべきものだろう。

モンゴル語ハルハ方言の例において、形動詞が副詞的に用いられているのが興味深い。この言語では形容詞をそのままの形で副詞的に用いることができるが、これと平行した現象であると思われる。品詞分類と準動詞の機能の関連については風間 (2012) で指摘したが、上記の推測が正しければこれもその 1 例ということになるだろう。

4.6. 並列

同一の時空間に起きる動作ではないためか、準動詞を用いる言語は比較的少ない。副動詞ではなく、名詞化もしくはそれに類する準動詞化を行う言語が目立つ。

イタリア語やスペイン語、ハンガリー語では、別個に主動詞を設け、2 つの動作を共に不定詞や分詞に格下げした表現が見られた。

日本語のように副動詞を重ねた後に軽動詞で文を締めくくるというパターンはまれで、朝鮮語にも観察されない。ニブフ語とタミル語には日本語によく似た構文が観察される。モンゴル語で形動詞が用いられている点にも注目したい。

ラワン語では、叙述文標識が後件にしか現れない。動詞として分類したが、この点で若干動詞性が劣ることに注意しておく必要がある。このことはカム・チベット語の例文の多くについても問題となる。すなわち(2)-(7), (10), (12), (13)などについて、助動詞は文末の述語にしか

現れていない。カム・チベット語の F/N (定動詞か準動詞か) の判断については専門家の批判等をいただけると幸いである。

4.7. 趨向(移動の目的)

全般に不定詞が圧倒的に優勢である。

スペイン語において前置詞が異なるなど、移動動詞の場合には、他の一般動詞の目的とは異なる形態が現れる。ラワン語でも「移動の目的」専用の形式が観察される。

ダグール語では、語幹そのままの形式が現れている点に注意を惹く。カム・チベット語では、動詞が直接、与格の接辞をとっている(したがってここでの動詞は不定詞のように、名詞相当になっているとも考えられる)。

ナーナイ語やソロン語(さらに他のツングース諸語の多くでも)では、後項の移動動詞が文法化し接辞化した形式が見られることも特筆される。

アラビア語、ペルシア語では、他の多くの言語とは異なり定動詞が観察されるが、接続法である点に注意したい。

4.8. 目的

ウラル語族では目的に特別な法の形式が使われる。ハンガリー語では命令法の形式をとるといふ。トルコ語でも3人称命令の形式が現れる。

ダグール語、ソロン語では、引用と発話動詞の組み合わせを用いる。トルコ語でもやはり引用の形式が観察される。

日本語の「～(スル) ヨウニ」という形式は、「～シタヨウニ」とはならず、「*スルノダヨウニ」のように、スルとヨウニの間に他の形式を挿入することもできないので、全体で一種の副動詞(N)と判断することにした。

4.9. 恒常的条件

イタリア語、スペイン語などのように、動詞を用いずに単に「夏には」とする言語も多い。これはしたがって単文(S)となる。「夏になると」という従属節は、たしかに夏がやって来るのは当たり前のことであるので、日本語的な表現(ナル型言語)を選んでしまったのかもしれない。作成したアンケート例文に問題があったかもしれない。

4.10. 確定条件・生起、および確定条件・発見

多くの言語で、andやWhenに対応するような形式が観察される。つまりは、通常の時間的な継起的表現が用いられるということである。日本語のように、ト、タラのような「条件」形式はほとんど使われない。たしかに、どちらもすでに起きてしまった過去の出来事であるので、「条件」形を用いるのはおかしい。むしろ日本語で「条件」形式が使えることの方が特殊であ

る。日本語のこれらの「条件」形式が理由などの表現と連続していることはしばしば指摘されている。日本語のト、タラは主節に対する相対的な時間を示すのが本来の機能であって、「条件」の意味はそこから2次的に生じるものと考えるべきではないだろうか。この問題についてはまた稿を改めて論じることにしたい。

イタリア語は、他の欧州の印欧諸語とは異なり、分詞等、準動詞による表現がある。

朝鮮語は日本語のように条件表現との連続性を示さず、理由の表現との連続性を示す。モンゴル語でも典型的な条件形式は使えない。ただし(12)のハルハ方言で観察される -tAI は時間的な限界点を示すとともに、条件的な用法も併せ持っている。

日本語のように条件にも使える形式が用いられるのは、もっぱらトルコ語のみで（しかしもっとも一般的な条件形式ではない）、他にはナーナイ語の(12)で時間的条件副動詞が用いられているのみであった。ソロン語ではどちらにも条件副動詞が用いられているが、文末が過去形になっていない（媒介言語が漢語であるために生じた問題である）。

モンゴル語内部では方言差が観察された。このうちバイリン方言の形式は形動詞に2人称の付属語が連続する形式であり、興味深い（ダグール語の(12)の例文にも同様の形式が観察されるので、存外古くからある形式であるのかもしれない）。表中では、これをいちおうF（定動詞）とみなしてカウントしたが（形動詞には文末用法があるため）、非定形の動詞とみるべきかもしれない（あまり独立性が高いように感じられない）。

4.11. 仮定条件

ドイツ語では語順の変更のみで仮定条件が表わせる点が興味深い。

4.12. 反実仮想

フランス語では助動詞＋不定詞で表現しているので、複文ではなく、単文である。スペイン語における(15)も同様である。イタリア語の(14)においても単文の表現が可能である。

(16) 「あんなどころに行かなければよかった」に対応する中国語は、「あんなどころは、早くに知っていたら行かないことにしたのに」のような表現になっている。仮定が帰結の方に移動しているが、これは時系列に沿った表現にするためだろうか。

ニブフ語における反実仮想の条件節の形式は、名詞化であるので、準動詞とみても良いが、この形はそのまま主節の文末述語となり得るため、定動詞の形式として判断した。

4.13. 仮定条件＋働きかけのモダリティ

他の印欧語では、後件に働きかけのモダリティがあっても、条件表現が使用可能であるが、ロシア語では不可であるという。3.3. で取り上げた問題に関連したデータとして、興味深い。

4.14. 時間的前後関係に即していないナラ条件文

時間的前後関係に即していないナラ型の条件文は、ロシア語では一般的な条件表現によって直訳することができない。ここでもロシア語における条件表現の使用における制限が観察される。

朝鮮語とモンゴル語ハルハ方言、ダグール語、ソロン語、ニブフ語では同じような制限が働き、単純に前件の「来る」を条件形式にするだけでは表現されない。この点で日本語とは異なっている。

4.15. 予想を伴った条件文と予想を伴わない条件文

英語であれば、予想を伴った条件文と予想を伴わない条件文において、when と if のような使い分けが観察されるわけだが、他の言語ではどうだろうか。同じ形式が用いられる言語と、異なった形式が用いられる言語に整理してみた。なお、「もしかしたら」のような副詞が加えられるだけのよう場合には、同じとみなした。

- ・異なった形式を用いる言語：フランス語、イタリア語、スペイン語、フィンランド語、中国語、ナーナイ語、カム・チベット語、マラガシ語、ウルドゥー語、タミル語、アラビア語、ペルシア語、トルコ語、トルクメン語
- ・異なった形式を用いることもできる（つまり、違いを示すこともできる）言語：ドイツ語、朝鮮語
- ・同じ形式を用いる言語：ハンガリー語、ロシア語、モンゴル語、ダグール語、ソロン語、ニブフ語、ラワン語

異なった形式を用いる言語には、団子型動詞連続を用いる印欧諸語を中心とした言語が並んでおり、同じ形式を用いる言語には、鎖型動詞連続を用いる北東アジアの言語が多く並んでいることがわかる。ただその内的関連の理由については、現時点でまだうまく説明できていない。

同じ形式を用いる言語においては、もっぱら if にあたる形式が使用され、when にあたる形式は使用されないようだ（ただしマレーシア語では使えるという）。未来の出来事でも when にあたる形式を使用する点で、印欧語やフィンランド語は特徴的であると言ってもよいだろう。

4.16. 相関構文

相関構文には、「誰が働かない、誰が食べない」のように疑問詞（／関係詞というべきか？）が両方の節に用いられるタイプと（下記の [疑-関-疑-関]）、「誰が働かない、そいつが食べない」のように指示詞で受けるタイプ（[疑-関-指]）、さらに「誰が働かない、食べない」のように後続する節には受ける語が無いタイプ（[疑-関- \emptyset]）がある。

相関構文を用いない場合には、日本語の「働かないものは、食べない」のように、連体節や

名詞化によるタイプ（[連体節/名詞化による単文表現]），「働かなければ，食べられない」のような条件文によるタイプ（[条件文]）が観察された．以下該当した言語を整理しておく．

- ・[疑/関-疑/関]：(中国語)，ダグール語，ソロン語
- ・[疑/関-指]：ロシア語，ナーナイ語，マレーシア語，ウルドゥー語
- ・[疑/関-∅]：ドイツ語，フランス語，イタリア語，スペイン語，フィンランド語，ハンガリー語，タミル語，アラビア語
- ・[連体節/名詞化による単文表現]：中国語，日本語，朝鮮語，ニブフ語，タミル語，ペルシア語，トルコ語，トルクメン語

- ・[条件文]：モンゴル語，ダグール語，ソロン語，カム・チベット語
- ・その他：タミル語（[名詞化-疑/関]），スペイン語（[（指+）関-∅]）

地域的には隣接した言語同士が似た表現の型を示しているように見える．疑問詞の関係詞的な力，言い換えれば文法化の度合いが関係しているようにも感じられる．これらについても今後のさらなる考察を必要とする．

4.17. 言いさし

トルコ語における勧誘の言いさしは，モーダルな接辞が付いている点に注意が必要である．

「言いさし・つき放し」の日本語の例文（「やりたいなら（自分の）好きなようにやれば」）は，実際には二重に複文になっている．したがって，F や N の判断は「やりたいなら」の部分について行った．

4.18. 仮定的逆接

仮定的逆接には，「このコップを落とせば割れない」のように条件形式が用いられる言語と，日本語の「このコップは落としても割れない」のように累加の形式（日本語ではモ）が用いられる言語，条件形式と累加の形式の両方が組み合わされて用いられる言語が観察された．

- ・条件形式を含む：ドイツ語，フランス語，スペイン語，フィンランド語（条件形式のみ，つまり条件文と同形），ハンガリー語（同じく条件形式のみ），ロシア語，ダグール語，ナーナイ語（条件形式のみ），タミル語，トルコ語，トルクメン語

- ・累加的な形式を含む：ドイツ語，フランス語，イタリア語，ロシア語，中国語，朝鮮語，日本語，モンゴル語，ダグール語，ウルドゥー語，タミル語，トルコ語，トルクメン語

タミル語では、この条件+累加のような形式が、次のアクチュアルな逆接や、次の次の逆接3でも用いられている。トルクメン語でも、やはりこの条件+累加のような形式が、次のアクチュアルな逆接で用いられており、次の次の逆接3は条件形になっている。

4.19. 逆接3

逆接3は異主語による逆接の表現である(「彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった」)。これに関しては、次の2つのタイプに分けて整理してみた。

- ・[28]仮定的な逆接や[29]アクチュアルな逆接と同じ逆接の形式が使える言語：フィンランド語、ロシア語、朝鮮語、日本語、モンゴル語、マレーシア語、マラガシ語、ウルドゥー語、タミル語、アラビア語
- ・[28]仮定的な逆接や[29]アクチュアルな逆接と同じ逆接形式は使えない(少なくとも、使用されていない)言語：ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ハンガリー語、中国語、ソロン語、ニブフ語、カム・チベット語、ペルシア語、トルコ語

同主語の逆接と異主語の逆接において、異なった逆接形式を用いなければならない言語は、同主語/異主語の違いにうろさい言語であるということになる。ヨーロッパの言語が多く見られるが、必ずしもそれに限られているわけではないことがわかる。

4.20. マデ・マデニ(時間的期限1・2)

日本語では、マデとマデニでは意味が異なって来るが、[31]マデと[32]マデニにおいて同じ形式を使用できる言語も観察された。

- ・同じ(もしくは、少なくとも同じ要素が使用可能)：イタリア語、フィンランド語、ハンガリー語、朝鮮語、モンゴル語バイリン方言、ダグール語、マラガシ語、トルコ語、トルクメン語

なお、ハンガリー語とマラガシ語では、接続形式は同じでも、動詞のアスペクトや時制によって「マデ」ト「マデニ」の違いが明示されるようになっているようだ。

アンケートの日本語文は「あの人が来るまで、私はここで待っています。」および「あの人が来るまでに、食事を作っておきますよ。」のような文であったが、日本語で「あの人が来ないうちは、私はここで待っています。」および「あの人が来ないうちに、食事を作っておきますよ。」というような表現形式があるように、これらの文に否定形式を用いる言語もいくつか観察された。これについても整理しておく。

- ・マデ・マデニのどちらにも否定が現れる：イタリア語, ロシア語, カム・チベット語
- ・マデの方に否定が現れる：ウルドゥー語
- ・マデニの方に否定が現れる：ニブフ語, ラワン語

[特集] (連用修飾的) 複文

《アンケートの意図とその説明》

日本語をはじめとするいわゆるアルタイ型の言語では、連用的な接続形式が発達している反面、接続詞はあまり使われない。これに対して印欧語の多くなどでは、接続詞が発達していて、定形の動詞 (finite verb) を接続詞で繋ぐことが多い反面、分詞などの準動詞 (verbal) はあまり用いられない。さらに中国語のような孤立型の言語では、接続形式も接続詞も用いずに動詞をつなげていく (いわゆる動詞連続) が、その連続に関しては意志性やアスペクト、同主語/異主語などに関する一定の制限があり、構文の型が決まっている面もある。

こうした動詞連続の諸タイプによる複文の形成のバリエーションを対照しようというのが今回のアンケートの狙いである。動詞連続の類型論について、詳しくはアンケート末の論考も参照されたい。

具体的には、同時的動作、継起的動作、並行的動作、理由、目的、条件、逆接、言いさし、などの表現を取り扱う。

(1) 彼はいつも新聞を読みながらご飯を食べる。

【同時動作】非限界的なアスペクトを持つ2つの動詞が同時に行われる際の表現。日本語では同主語でのみ可能だが、他の言語ではどうだろうか？ 朝鮮語やモンゴル語では同時と継起で異なる接続形式が使い分けられるが、その境界はどこにあるだろうか？

(2) (私は) 昨日は10時に家に帰って、少しテレビを見て (から)、寝ました。

【継起的動作・物語的連鎖】これについては下記の動詞連続の類型論を参照されたい。このような文中に現れる動詞形態を medial verb とし、cosubordinate clause を設定するという考えが行われている (Foley & Van Valin (1984))。このような文の文中の動詞の形式を、定形の動詞ではなく、分詞のようないわゆる準動詞で表現できる言語はどの程度あるだろうか？ 欧米の印欧語の多くのように、定形の動詞と接続詞で表現する言語でも、たとえ少しでも準動詞が使用可能だろうか？

(3) (私は) 昨日階段で転んで、ケガをしてしまった。

【継起:理由】Bickel(1998)は、「Haspelmath & König(1995)によって提示された証拠は、“converbs (副動詞)”に少なくとも2種類あって、両者は同じ cover term のもとに包摂されるべきではない、ということを示唆している」という。それを Bickel(1998)はヨーロッパ型 (European)、とアジア型 (Asian) と呼んでいる。アジア型とは、Haspelmath & König(1995)所収の Johanson(1995) と Tikkanen(1995)の章にもっともよく例証されているように、一つもしくは一連の従属的な動詞

の(諸)形式に、副詞的修飾と(修飾ではない)物語的連鎖の機能の両方が実現しているタイプであるという。この修飾機能が含まれているという点は、アジア型副動詞をパプア諸語に見られる **medial verbs** と分かっ点であると言う。日本語におけるテ形のように、(2)で用いられた動詞形態が(3)でも用いられるような言語はどれぐらいあるだろうか？

(4) 今日父は会社に行って、兄は大学に行った。

【異主語】複文において、主語の管理は最も重要な問題である。指示転換 (switch reference) を持つような言語ではまさにこのような文で異主語の標示がなされることだろう。日本語のテ形はこの例文のように異主語を許すが、これは通言語的にはむしろまれなことかもしれない。何らかの対比が成立する主語同士や述語動詞の間でなければ成立しないものと思われる。他の言語での状況はどうだろうか？準動詞は使用可能だろうか？

(5) (あの人は) 今日は帽子をかぶって歩いていた。

【付帯状況】従属節の動詞が非限界動詞で、結果状態の残った状況で主節の動作行為が行われる、という表現である。従属節の示す内容は形容的なので、分詞をはじめとする準動詞は使われやすい構文なのではないかと思われる。

(6) (私は) 休みの日はいつも本を読んだり、テレビを見たりしています。

【並行動作】日本語ではこのようにタリによって列挙し、軽動詞スルによって文を締めくくる表現となる。欧米の印欧語の多くでは、(2)や(3)と同じく単に定動詞を接続詞で繋げるものと思われるが、ニュアンスの差は何によって表現されることになるのだろうか？

(7) 時間がないから、急いで行こう。

【理由・カラ】文末に働きかけのモダリティがくる際には、カラの方が用いられやすいということが言われている。日本語におけるようなカラとノデの違いが観察されるような言語はあるだろうか？

(8) 昨日は頭が痛かったので、いつもより早く寝ました。

【理由・ノデ】

(9) あの人は本を買いに行った。

【趨向/移動の目的】「～しに行く」による移動の目的を示す文である。移動の目的は、他の一般の目的節の複文とは異なった文法形式によって表現されるという通言語的傾向のあることが知られている。

(10) (彼は) 外が良く見えるように窓を開けた。

【目的・意図】 目的にも接続法等の直接法以外の法が現れる言語がある。

(11) ここでは夏になると、よく雨が降ります。

【恒常的条件】 日本語でトが用いられる恒常的条件の表現である。日本語共通語には比較的多くの条件形式があり、いわゆるト・バ・タラ・ナラの使い分けがある。日本語のように複数の条件形式やその使い分けを持つ言語はあるだろうか？

(12) 窓を開けると、冷たい風が入って来た。

【確定条件・生起】 全体が過去の文であるので、もうすでに起きたことであり、実際は条件文ではなく、異主語による一種の継起的連続である。日本語では条件形式が使えるが、他にも条件形式（もしくはそれに近い形式や何らかの準動詞）が使用可能であるような言語があるだろうか？

(13) 坂を上ると、海が見えた。

【確定条件・発見】 (12)と同様の確定条件だが、主節が「発見」の事態となっているものである。

(14) 明日雨が降ったら、私はそこに行かない。

【仮定条件】 もっとも default で一般的な条件文である。この文で現れる形式が他の文での形式を見る基準となる。

(15) もっと早く起きればよかったなあ。

【反実仮想】 反実仮想では過去と関連した形式が通言語的によく用いられるようである。接続法等、特徴的な法の形式が現れる表現でもある。

(16) あんなところに行かなければよかった。

【反実仮想・前件否定】 反実仮想で、前件の条件が否定になっているものである。

(17) 1に1を足せば、2になる。

【一般的真理】 やはり日本語では条件形式が使用可能であるが、他の言語ではどうだろうか？ 条件形式が用いられない場合には、どのような形式が現れるだろうか？

(18) 駅に着いたら電話をしてください。

【仮定条件+働きかけのモダリティ】 後件に働きかけのモダリティが現れる文では、トやバは基本的に用いることはできず、もっぱらタラが用いられる。

(19) 日曜日になったら、みんなで公園に行きたいなあ。

【仮定条件+願望】やはり後件に願望のモダリティのある条件文である。

(20) 明日雨が降ったら困るなあ。

【心配】このタイプの文にもっばら現れる「心配法」のような動詞の形式を持つ言語もある。

(21) 家に来るなら、電話をしてから来てください。

【時間的前後関係に則していないナラ条件文】ナラはト・バ・タラとは異なり、時間的前後関係が逆転していても用いられる。主題と大きな関連を持っている。このような条件形式、さらには主題と関連のある条件形式を持つ言語はどの程度存在しているだろうか？

(22) [もうすぐベルが鳴るので] 鳴ったら、教えてください。

【予想を伴った条件文】英語で **when** が用いられるタイプの条件文である。

(23) [もしかしたらベルが鳴るかもしれないので] もし鳴ったら、教えてください。

【予想を伴わない条件文】英語で **when** を用いることができず、**if** しか用いられないタイプの条件文である。

(24) 働かざるもの食うべからず。／働かない者は、食べるべきではない。

【相関構文】「誰が働かない、誰が食べない」、もしくは「誰が働かない、その人は食べない」のような構文でこの内容を表現する言語がある程度存在すると言われており、これは相関構文と呼ばれている。いわゆる **headless relative clause** と呼ばれるような構文としても捉えられ、内容的には超時的な一般論を示すようである。

(25) もう少しお金があったらなあ。

【言いさし・願望】言いさし (**insubordination**) は近年内外での研究が進んでおり、なお注目を集めている。言いさしは何らかのモダリティ的な意味を実現することが多いという。

(26) これも食べたら？

【言いさし・提案】提案もしくは勧誘と言うべきモダリティの意味を実現している言いさしである。

(27) やりたいなら (自分の) 好きなようににやれば？

【言いさし・つき放し】同じ条件表現による言いさしだが、異なったモダリティの意味を実現している。

(28) このコップは落としても割れない。

【仮定的な逆接】 仮定的な逆接で、コップについての恒常的性質を問題にする表現である。

(29) このリンゴは高かったのに、ちっとも甘くない。

【アクチュアルな逆接】 主節従属節共に、すでに実現した事柄についての逆接表現である。

(30) 彼の家に行ってみたけれども、彼はいなかった。

【逆接3】 異主語による逆接の表現である。

(31) あの人に来るまで、私はここで待っています。

【時間的期限[1]】

(32) あの人に来るまでに、食事を作っておきますよ。

【時間的期限[2]】

<参考文献>

Bickel, B. (1998) Converbs in cross-linguistic perspective [review article of Haspelmath and König, eds., *Converbs*, Berlin: Mouton de Gruyter 1995]. *Linguistic Typology* 2, 381 – 397.

Foley, W. A. & R. D. Van Valin, Jr (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.

Haspelmath, M. (1995) The converb as a cross-linguistically valid category. In: Haspelmath, M. & E. König (eds.) (1995).

Haspelmath, M. & E. König (eds.) (1995) *Converbs in Crosslinguistic Perspective: Structure and meaning of Adverbial Verb Forms --- adverbial Participles, Gerunds*. (Empirical Approaches to Language Typology, 13.) Berlin: Mouton de Gruyter.

Johanson, L. (1995) On Turkic converb clauses. In: Haspelmath, M. & E. König (eds.) (1995).

Masica, C. P. (1976) *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.

Tikkanen, B. (1995) Burushaski converbs in their South and Central Asian areal context. Haspelmath, M. & E. König (eds.) (1995).

Tsunoda, Tasaku (ed.) (2013a) *Five levels in clause linkage. vol. 1*. Ibaraki.

Tsunoda, Tasaku (ed.) (2013b) *Five levels in clause linkage. vol. 2*. Ibaraki.

亀井孝・河野六郎・千野栄一(編) (1996) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 (「ビー玉型動詞連続」の項) 1105-1107. 東京：三省堂.

角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の接続とモダリティ』 東京：くろしお出版.